

「二〇二一年度本試験 第一問」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 河川は人間の経験を豊かにする空間である。人間は、本質的に**身体的存在であることによって、空間的経験を積むことができる**。このような**経験を積む空間を「身体空間」と呼ぼう**。河川という空間は、「流れ」を経験できる身体空間である。

② 河川の体験は、流れる水と水のさまざまな様態の体験である。と同時に、**身体的移動のなかでの風景体験である**。**河川の整備と河川を活かした都市の再構築ということであれば**、流れる水の知覚とそこを移動する身体に出現する風景の多様な経験を可能にするような整備が必要だということである。

③ **河川整備の意味は、河川の整備が同時に、河川に沿う道の整備でもある**という点に関わっている。場合によって、道は、水面に近いことも、あるいは水面よりもずいぶんと高くなっていることもある。どちらにしても、ひとは歩道を歩きながら、川を体験し、また川の背景となっている都市の風景を体験し、そしてまた、そこを歩く自己の体験を意識する。

④ **河川の体験とは、河川空間での自己の身体意識である**。風景とはじつはそれぞれの身体に出現する空間の表情にはかならないからである。風景の意味はひとそれぞれによって異なっている。**河川の空間が豊かな空間であるということ**は、何か**豊かに造られているから豊かだ、ということではない**。とりわけて何もつくられていなくても、たとえば、ただ川に沿って道があり、川辺には草が生えていて、水鳥が遊び、魚がハねる、ということであっても、そのような風景の知覚がひとそれぞれに**多様な経験を与える**。体験の多様性の可能性が空間の豊かさである。

⑤ 豊かさの内容が固定化された概念によって捉えられると、その概念によって空間の再編が行われる。たとえば「親水護岸」は水に親しむという行為を可能にするように再編された空間であるから、空間を豊かにすることであるように思われるが、その空間は「水辺に下りる」「水辺を歩く」というコンセプトを実現する空間にすぎない。そこでひとは、たしかに水辺に下りること、水辺を歩くことはできるが、**それ以外のことをする可能性は排除されてしまう**。この排除は川という本来自然のものが概念という人工のものによって置換されるということを意味している。それは、本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態と捉えることができる。

⑥ たとえば、流れに沿って歩いていくと、河川整備の区間によってそれを整備した事業者の違いによって、景観がちがうようになっていくことがある。もちろんこれは同じ風景が連続していることがよいということではない。問題なのは、土を中心につくられている上流の景観が下流にいくに従って、大きな石によって組み立てられているような場合である。これは、川の相を無視し、事業主体の概念が流れる川を区分けし、その区分けされた川の「タンペン」を概念化した結果である。

⑦ 川は、流れ来る未知なる過去と流れ去る未知なる未来とを結ぶ現在の風景である。この風景を完全に既知の概念によって管理すること、コントロールすることは、**川の本質に逆らうこと**になる。「河川の空間デザイン」という言い方には、危ういところが感じられるが、それは川のもつ未知なるものを完全に人間の概念的思考によってコントロールしうるもの、すべきものという発想が隠れているからである。

8 完全にコントロールされた概念空間に対して、**河川の空間にもとめられているのは、新しい体験が生まれ、新しい発想が生まれ出るような創造的な空間である。**川は見えない空間から流れてきて、再び見えない空間へと流れ去る。だから川は人生に喩えられる。人生は、概念で完全にコントロールできるようなものではない。川が完全にコントロールされた存在であるならば、川の風景に出会うひとには、そのコントロールされた概念に出会うだけであろう。そうになると、川は、訪れた人びとそれぞれの創造性とは無縁のものとなってしまう。

9 **都市空間は、設計から施工、竣工のプロセスで完成する。建造物が空間をセッティングして、そこで人びとの生活と活動が行われる。空間の創造は、その生活と活動の空間の創造である。人びとの活動の起点は建造物の建築の終点であるが、都市計画そのものは竣工の時点が終点である。しかし、河川空間の事情は異なっている。竣工の時点が河川空間の完成時ではない。むしろ河川工事の竣工は、河川の空間が育つ起点となる。それは庭園に類似している。**樹木の植栽は、庭の完成ではなく、育成の起点だからである。

10 だから、**河川を活かした都市の再構築というとき、時間意識が必要である。**川は長い時間をかけて育つもの、自然の力によって育つものであり、人間はその手助けをすべきものである。自然の力と人間の手助けによって川に個性が生まれる。**時間をかけて育てた空間だけが、その川の川らしさ、つまり、個性をもつことができる。**

11 **河川の空間は、時間の経過とともに履歴を積み上げていく。その履歴が空間に意味を与えるのである。**では、この時間にもとづく意味付与は、概念的コントロールによる意味付与とどこが異なるのだろうか。概念的コントロールによる意味付与は、河川空間の設計者の頭のなかにある空間意味づけであり、河川とはこういうものであるべきだ、という強制力をもつ。そのような概念によってつくられた空間に接するとき、風景は、ヨクアツ的なものになってしまう。風景に接したひとが自由な想像力のもとでそれぞれの個人的な経験を積み、固有の履歴を積み上げることを、ソカイしてしまおう。

12 **流れる水が過去から流れてきて、未来へと流れ去るように、河川の空間は、本来、時間を意識させる空間として存在する。つまり川の空間は、独特の空間の履歴をもつ。**履歴は概念のコントロールとは違って、一握りの人間の頭脳のなかに存在するものではない。多くの人びとの経験の蓄積を含み、さらに自然の営みをも含む。**こうして積み上げられた空間の履歴が、その空間に住み、またそこを訪れるそれぞれのひとが固有の履歴を構築する基盤となる。**

13 **人間はいま眼の前に広がる風景だけを見ているのではない。**たとえば、わたしは昔の清流を知っているので、いまの川の水の色を見れば、どれほど空間が貧しくなったかを想像することができる。その人の経験の積み重ね、つまり、そのひとの履歴と空間に蓄積された空間の履歴との交差こそが風景を構築するのである。一人ひとりが自分の履歴をベースに河川空間に赴き、風景を知覚する。だから**その風景は人びとに共有される空間の風景であるとともに、そのひと固有の風景でもある。**風景こそ自己と世界、自己と他者が出会う場である。**空間再編の設計は、ひとにぎりの人びとの概念の押しつけであってはならない。**

## 【e xのグループ分け・設定課題・デイスリの解消地点の確認】

### ① e xのあら読みと設定課題の把握、結束からのデイスリ構文の曖昧さの解消

「**河川整備の空間再編**」(河川を活かした都市の再構築)であれば(設定課題)、求められているのは新しい体験や発想が生まれ出る空間の創造性と、空間に意味を与える独自の空間の履歴を育成する時間意識

### ② e xのグループ分け(この文章では二つの立場が対立していることが分ればよい)

河川の体験の豊かさとは、(都市から河川に沿って続くさまざまな歩道(e x 1)を歩きながら)河川空間でそれぞれの人が知覚する風景の与える多様な経験であり(e x 2)

|| 川の空間はそこを訪れる人々の経験の蓄積を含み、自然の営みを含む独特の空間の履歴を持つ(e x 7)  
竣工後の空間履歴を積み上げるといふ考え方: 身体空間の多様性を前提に置く筆者

↑ (e x 6) ↓

竣工の段階で完成: 都市空間を設計した事業主体による空間の捉え方

一握りの人々による不自然な(e x 4) 概念の押しつけ(e x 3, 5)であつてはならない

### ③ 主なレトリックを使ってe xの説明を試みる|| 筆者の構想の中にあつたストーリーを再構築

※最後の傍線部付近のレトリックまでここで見つけられているならば、ほとんどの場合一二〇字記述までここで得点できる目処が立つ。最初の方のレトリック(←r 1)は後半で解きほぐされていることが多いので、あとの方の(←r 2) < (←r 3) < で回収理解される伏線であれば、氣にとめる必要は無い。

(過去と未来とを結ぶ自然の川の相(e x 4, 5)で、都市設計の事業主体の想定以外の体験(e x 3)と発想をする可能性) || ←r 1 川は**人生**に喩えられる。

|| 都市と違って河川は(←r 2 庭園と同じように)竣工を**起点**として**空間の履歴**(e x 2 個々の体験の多様性、訪れた人々それぞれの創造性)を育成していく。その履歴に空間の意味がある。

本来は、←r 3 **過去から流れてきて未来へと流れ去る水と同じように**、**空間の蓄積された履歴**とその**人の経験の積み重ね**とが交差する個々人に固有の風景(e x 7 || 空間的経験を積むための**身体空間**)でもある。都市計画の設計者の概念の押しつけで河川の空間を再編してはならない。

### 〔設問〕

問1 「身体的移動のなかでの風景体験」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

問2 「本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

問3 「それは庭園に類似している」(傍線部ウ)とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。

問4 「河川の空間は、時間の経過とともに履歴を積み上げていく」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

問5 「風景こそ自己と世界、自己と他者が出会う場である」(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。)

問6 傍線部 a、b、c、d のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a ハ(ねる)    b ダンペン    c ヨクアツ    d ソガイ

【二〇一一年度本試験 第一問】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 河川は人間の経験を豊かにする空間である。人間は、本質的に身体的存在であることによって、空間的経験を積むことができる。このような経験を積む空間を「身体空間」と呼ぼう。河川という空間は、「流れ」を経験できる身体空間である。

② 河川の体験は、流れる水と水のさまざまな様態の体験である。と同時に、身体的移動のなかでの風景体験である。河川の整備と河川を活かした都市の再構築ということであれば、流れる水の知覚とそこを移動する身体に出現する風景の多様な経験を可能にするような整備が必要だということである。

③ 河川整備の意味は、河川の整備が同時に、河川に沿う道の整備でもあるという点に関わっている。場合によって、道は、水面に近いことも、あるいは水面よりもずいぶんと高くなっていることもある。どちらにしても、ひとは歩道を歩きながら、川を体験し、また川の背景となっている都市の風景を体験し、そしてまた、そこを歩く自己の体験を意識する。

④ 河川の体験とは、河川空間での自己の身体意識である。風景とはじつはそれぞれの身体に出現する空間の表情にほかならないからである。風景の意味はひとそれぞれによって異なっている。河川の空間が豊かな空間であるということは、何か豊かに造られているから豊かだ、**ということではない**。とりわけて何もつくられていなくても、たとえば、ただ川に沿って道があり、川辺には草が生えていて、水鳥が遊び、魚が

ハねる、ということであっても、そのような風景の知覚がひとそれぞれに多様な経験を与える。体験の多様性の可能性が空間の豊かさである。

⑤ 豊かさの内容が固定化された概念によって捉えられると、その概念によって空間の再編が行われる。たとえば「親水護岸」は水に親しむという行為を可能にするように再編された空間であるから、空間を豊かにすることであるように思われるが、その空間は「水辺に下りる」「水辺を歩く」というコンセプトを

実現する空間に**すぎない**。そこでひとは、たしかに水辺に下りること、水辺を歩くことはできるが、**それ以外**の**ことをする可能性は排除されてしまう**。この排除は川という本来自然のものが概念という人工のものによって置換されるということの意味している。それは、本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態と捉えることができる。

⑥ たとえば、流れに沿って歩いていくと、河川整備の区間によってそれを整備した事業者の違いによって、景観がちぐはぐになっていることがある。もちろんこれは同じ風景が連続していることがよいということではない。問題なのは、土を中心につくられている上流の景観が下流にいくに従って、大きな石によって組み立てられているような場合である。これは、川の相を無視し、事業主体の概念が流れる川を区分けし、その区分けされた川の タンペンを概念化した結果である。

⑦ 川は、流れ来る未知なる過去と流れ去る未知なる未来とを結ぶ現在の風景である。この風景を完全に既知の概念によって管理すること、コントロールすることは、川の**本質に逆らう**ことになる。「河川の空間デザイン」という言い方には、危ういところが感じられるが、それは川のもつ未知なるものを完全に人間の概念的思考によってコントロールしうるもの、すべきものという発想が隠れているからである。

8 完全にコントロールされた概念空間に対して、河川の空間にもとめられているのは、新しい体験が生まれ、新しい発想が生まれ出るような創造的な空間である。川は見えない空間から流れてきて、再び見えない空間へと流れ去る。だから川は人生に喩えらる。人生は、概念で完全にコントロールできるようなものではない。川が完全にコントロールされた存在であるならば、川の風景に出会うひとには、そのコントロールされた概念に出会うだけであろう。そうなると、川は、訪れた人びとそれぞれの創造性とは無縁のものとなってしまふ。

9 都市空間は、設計から施工、竣工のプロセスで完成する。建造物が空間をセッティングして、そこで人びとの生活と活動が行われる。空間の創造は、その生活と活動の空間の創造である。人びとの活動の起点は建造物の建築の終点であるが、都市計画そのものは竣工の時点が終点である。しかし、河川空間の事情は異なっている。竣工の時点が河川空間の完成時ではない。むしろ河川工事の竣工は、河川の空間が育つ起点となる。それは庭園に類似している。樹木の植栽は、庭の完成ではなく、育成の起点だからである。

10 だから、河川を活かした都市の再構築というとき、時間意識が必要である。川は長い時間をかけて育つもの、自然の力によって育つものであり、人間はその手助けをすべきものである。自然の力と人間の手助けによって川に個性が生まれる。時間をかけて育てた空間だけが、その川の川らしさ、つまり、個性をもつことができる。

11 河川の空間は、時間の経過とともに履歴を積み上げていく。その履歴が空間に意味を与えるのである。では、この時間にもとづく意味付与は、概念的コントロールによる意味付与とどこが異なるのだろうか。概念的コントロールによる意味付与は、河川空間の設計者の頭のなかにある空間意味づけであり、河川とはこういうものであるべきだ、という強制力をもつ。そのような概念によってつくられた空間に接するとき、風景は、ヨクアツ的なものになってしまふ。風景に接したひとが自由な想像力のもとでそれぞれの個性的な経験を積み、固有の履歴を積み上げることが、ソカイしてしまふ。

12 流れる水が過去から流れてきて、未来へと流れ去るように、河川の空間は、本来、時間を意識させる空間として存在する。つまり川の空間は、独特の空間の履歴をもつ。履歴は概念のコントロールとは違って、一握りの人間の頭脳のなかに存在するものではない。多くの人びとの経験の蓄積を含み、さらに自然の営みをも含む。こうして積み上げられた空間の履歴が、その空間に住み、またそこを訪れるそれぞれのひとが固有の履歴を構築する基盤となる。

13 人間はいま目の前に広がる風景だけを見ているのではない。たとえば、わたしは昔の清流を知っているもので、いまの川の水の色を見れば、どれほど空間が貧しくなったかを想像することができる。その人の経験の積み重ね、つまり、そのひとの履歴と空間に蓄積された空間の履歴との交差こそが風景を構築するのである。一人ひとりが自分の履歴をベースに河川空間に赴き、風景を知覚する。だからその風景は人びとに共有される空間の風景であるとともに、そのひと固有の風景でもある。風景こそ自己と世界、自己と他者が出会った場である。空間再編の設計は、ひとにぎりの人びとの概念の押しつけであってはならない。

問1 「身体的移動のなかでの風景体験」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

問2 「本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

問3 「それは庭園に類似している」(傍線部ウ)とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。

問4 「河川の空間は、時間の経過とともに履歴を積み上げていく」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

問5 「風景こそ自己と世界、自己と他者が出会う場である」(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上二二〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。)

問6 傍線部 a、b、c、d のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

- a ハ(ねる)                      b ダンペン  
c ヨクアツ                      d ソガイ